

私と汝が「話し合ふ」こと——「表現」概念の検討から

Nishida Kitarō's "I-Thou Dialogue" as the Verbal Event of "Expression"

竹内彩也花 Sayaka Takeuchi

京都大学大学院文学研究科博士課程新 2 回

本発表は、西田幾多郎の論文「私と汝」において、私と汝が「話し合ふ」ということの内実を、これと密接に関わる「表現」概念の検討から明らかにするものである。

「私と汝」は、それまで自己の意識の根柢への超越として問われてきた「自覚」の底に「絶対の他」が見られ、同時に隣人や過去の私としての「汝」と隔てられつつ相会う地平を「自覚」の内に開いた記念碑的な論文である。また私と汝の人格的応答に歴史や社会の成立の原初的意義が認められたことは、後期の歴史・社会の思索へ向かう重要な契機となった。とはいえ、私と汝の交互性から社会存在を基づける立場は、すぐさま田辺元により不十分と批判され、共同関係を持たない「彼」や、「種」の媒介の必要性が主張された。この批判は西田にもある程度受容されたが、そもそも絶対の他において成り立つ私と汝の人格的応答が、私と汝との二者関係、あるいは絶対の他との三すくみに閉じたものであったのかという点に関しては、再考の余地がある。

西田は、人格的な応答とは、相異なる人格を自己の中に「直観」することだとしながら、それは私と汝が「話し合ふ」という「表現」の出来事の意義を持つてくるのだと言う。なにゆえ私の底に汝を直観することがただちに「話し合ふ」という意味を持つのかについては、これまで殊更問われてこなかった。だが、直観と言葉の出来事との内的な連関は、「見るもの無くして見る」直観において現れてくる「自己自身を言表する事実」たる「表現」の出来事として、以前から問題にされていたものだ。かつ「表現」は、単に主観的なものの表出ではなく、むしろ自己を超えた客観的な真理、あるいは「事実」の成立の場とも考えられてきた。とすれば「話し合ふ」こともまた、私と汝とを超えた言葉の出来事であって、すでに別の汝や彼との関わりを織り込んだ、あるいはそこへ開かれた事態ではなかったか。

本発表では、「表現」概念において直観や人格的關係である「愛」と言葉の結びつきを「私と汝」以前のテキストから辿ることによって、なぜ汝を「直観」することが「話し合ふ」という意味を持つのかを検討し、この事態の内実と射程を再評価することを目指す。